大森二中だより

令和４年度　大森二中の合言葉「思いやり」
スローガン　笑顔満開　いつも心に太陽を！

令和４年度
第 76 回卒業式 号

大森第二中学校
校長　成清敏治
電話 3762-6456

第 76 回卒業式　式辞（抜粋）

今日は皆さんの門出に、現在大リーグで活躍し、投手と打者の二刀流で野球の価値観を変えた大谷翔平選手の生き方を紹介します。

現在行われているＷＢＣの活躍を見ると、順調にここまできたように思うかもしれませんが、決して順風満帆な野球人生ではありませんでした。太股を肉離れ、成長痛を伴う足の損傷、高校３年最後の夏は、決勝で敗れて甲子園出場は叶わずに終わりました。その高校１年の冬には、東日本大震災に襲われ、チームとしても過酷な経験をしました。ただ、彼は**「アクシデントの時こそ、新しい自分と出会えるチャンス」**だと捉え、そういった逆境をバネにして、新しい自分へと進化を重ねていきました。共通する人としてフィギアスケートで２大会連続金メダルをとった羽生結弦選手も、東日本大震災の逆境を乗り越えました。

大谷選手はプロ野球の日本ハムに入団した際、二刀流がプロで通用するかどうか、様々な議論がありました。どちらかといえば、否定的な意見が多かったようです。その時も**「出来ないと決めつけるのは嫌でした。ピッチャーが出来ない、バッターが出来ないと考えるのも本当は嫌だった。」**という言葉を残しています。二刀流ならではの調整、練習量、メンタルの整え方。目標の種類は違っても、過去の自分が築き上げた自信が、今の大谷選手を作っています。新しいことに挑戦するとき、他人はあれこれ批評をするものです。それよりも、まずは自分がどうかを問うべきこと、過程（プロセス）が大事なことを教えてくれるエピソードです。皆さんも周囲の意見に左右されず、自分が積み重ねてきた自信をもって、様々なことに挑戦をしていってください。

大谷選手は向上心を「自分を知る」こと捉えています。世の中で１番難しいことだと彼はいいます。**「まずは自分のスタイルで、自分のベストのボールを、どのバッターにも投げることが出来れば打たれないというふうに考えることが大事」**との言葉は、自分の実力を客観的に評価し、常に前向きに物事を考えている姿勢が想像できます。相手の情報に振り回されすぎて、本来対応すべきことを忘れてしまっては勝負にならない。自分を知って相手を知れば、自ずと対処方法は見えてくると大谷選手は言います。自分と対話することが向上心･･･自分と闘っているからこそ、魅力あふれる人間性、謙虚な振る舞いが自然と出てくるのだと思います。

大谷選手の野球哲学は、彼の生き方そのものです。

「先入観は可能を不可能にする。自分で無理だと思ったら出来なかった。最初から出来ないと決めつけるのはやめようと思った。」

「自分がやりたいと思える練習であれば、努力だとは思わない」

どこまでも進化を続ける彼は、徹底して自分と向き合い、昨日よりは今日の自分を高め続ける存在です。

最後になりますが、皆さんも４月からいよいよ新しい場所での生活が始まりま

す。大谷選手は高校１年生の時に甲子園で優勝することを目標に立てました。その時に発した言葉に感動しました。**「野球の技術だけでなく、私生活、学校生活、周りを思いやる気持ちも含めて、日本一の選手になります」**と。どうか皆さんも新しい生活で何かの分野で目標を高くもち、徹底して自分と向き合う強い自分、しなやかに世の中を生きていく力、自分をどこまでも高め他者と助け合いながら人生を歩んでください。それがみんなの笑顔につながり充実した人生を歩むことにつながります

第 76 回卒業式　卒業の言葉

新型コロナウイルス。私たちには一学年の頃からついてまわる新型コロナウイルスという存在がありました。その影響は大きく、例えば一年の最初の頃は、例年とは違う、分散登校という形で少人数授業でした。運動会は、二年の時まで合同体育発表会として学年ごとに行われ、合唱コンクールは学校の体育館で開かれました。こう述べてみるとあまり良い思い出は作れなかったのではと思う方もいるのではないでしょうか。これらの場面に直面した時、確かに「ああ、もしコロナが無ければなあ。」と毎回思っていました。しかし今になって思い返してみると三年間の思い出すべてが大切な宝物のように見えます。

中学に入ると同時に入った一斉休校、最初は好きなだけ家でくつろいで優雅な日々を過ごしていました。しかし日が経つにつれ、特にやることのない退屈さ、友達に会えない寂しさが大きくなっていき、結果的には、「いつ終わるのだろう。」、「いつ学校に行けるのだろう。」と登校を待ちわびる気持ちへと変わっていきました。退屈だと思っていた学校を待ち遠しく思うのは初めてで、同時に今までの日常がどれだけ大切なものだったのか身に染みて感じました。

しかし、このイレギュラーな生活は私に心を成長させる機会を何度も与えてくれました。例えば、合同体育発表会。これは学年だけで開かれるもので、保護者も来ず、二時間で終わってしまう行事でした。最初こそは不満だらけでした。「どうして」、「なんで」という思いで心に暗雲が広がっていくような感じがしました。そんな中で、私がこのネガティブな思考から抜け出せたのはクラスメイトの存在のおかげでした。リレーでどうやったら勝てるか、走順はどうするか、綱引きは女子と男子どう置くか、いろんな事を皆で考えているうちにだんだんと心が明るくなり、スカッと気持ちが晴れていきました。

どんなに退屈だろうと思っていることも仲間と全力で取り組めば、最高に楽しいことになる。あるいは、どんなことでも、取り組む姿勢一つでどんな形にも変えられる。これは、私にとって三年間で一番の教訓です。これはイレギュラーな日常を味わってきたからこそ得られたものだと思っています。

「新型コロナウイルスがあって良かった」とは思いません。しかし、「もしコロナがなければ」は考えなくなりました。三年に上がってからは規制が緩くなり、一、二年ではできなかったことができるようになりました。そこで今まで味わえなかったことも堪能でき、一、二年の時とは少し変わった一年を過ごせて、新鮮でとても楽しかったです。また私たち生徒が楽しめるように、学べるようにしてくださった先生方、毎日一番近くで優しく見守って下さった保護者の方々、本当にありがとうございました。

最後に、私はこの大森第二中学校で三年間を過ごし、たくさんの仲間に出会い、多くの思い出ができました。二中は私にとって大切な場所です。そんな大切なこの場所にいられるのも今日が最後です。この大森第二中学校、今いる仲間、全てに感謝し、前に進もうと思います。本当にありがとうございました。

令和五年三月十七日　卒業生代表　千葉音実